特集２　戦時期の航空機工業と疎開地下工場⑥

「アジア・太平洋戦争下水島軍事機密史料集
―航空機工場と航空基地建設の実態―」を監修して

太田　健一

この度、表題の如き史料集を上梓することができた。収録した史料は、アジア・太平洋戦争末期の水島地区で展開した航空機工場（三菱重工業株式会社水島航空機製作所）と航空（倉敷航空隊）基地建設の実態を克明に記録したものである。

この一帯は今日、航空機生産工場から平和産業に変身した三菱自動車が操業し、また戦時中に掘られて地下工場として機能した亀島山を文化遺産として後世に伝えようとする動きが高まっている地域である。この一帯、すなわち軍事生産基地の建設と運営の実態は先行研究によって、その全貌は或る程度は解明されていたが、終戦時に三菱重工業が大量の資料を焼却し、また岡山県や倉敷市の行政当局においても資料を処分していた経緯もあり、未解明の部分を多く残していた。

その未解明の部分を鮮明にする史料が古書店に忽然と現われ、倉敷市在住の小川江南氏によって入手され、さらに今回の上梓につながっていったのである。小川氏は戦時中、動員されて航空機生産に従事されており、史料入手の欲求が極めて強かったのである。この経緯をみる時、セレンディピティー(Serrendipity)という言葉は自然科学のみならず、歴史学や歴史研究においても存在するということをあらためて感じた次第である。いずれにしても小川氏のご英断に敬意を表したい。

今回公表の史料は、元岡山県職員牧野文蔵技師が所蔵されていたと推定している。同技師は明治三三年七月一〇日生れで、昭和一六年に三菱重工業の工場造成が着手された当初より、「岡山県特設臨海工業地帯造成事務所長として活躍し、戦後は河川課利水係長に就任し（昭和二五年）、岡山市西中島町にて昭和五四年八月二一日に死去されている。同技師は三菱重工業、岡山県、軍部（呉海軍・軍需省）の三者会議の様子を記録した史料（その殆んどに極秘・軍極秘の刻印が押されている）に、「牧野」なる自分の印鑑を押印して大切に保管していたと思われる。

収録史料は四部に分けて編集しているが、重要と思われる第一の史料は、三菱側が昭和一七年五月九日付で記録した「岡山工場建設経緯並現状」（三菱岡箋計二三頁、軍極秘が刻印されている）である。同史料は先行研究にこま切れに紹介されているが（昭和四三年刊『水島工業地帯生成発展過程の研究』上巻、「岡山大学地域経済研究班」編）、全体を通して精読する必要があると考えて全容を収録した。この史料によって、日中戦争以後において、海軍航空本部が三菱重工業名古屋航空機製作所に対し、どのように生産力拡充計画を要請し、これに対して三菱側がいかに対応し、岡山県の協力を得て岡山工場を水島地区に建設して航空機生産を進めようとしたかが如実に判明する。

昭和一七年六月以降の経過は史料を三群に分けて編集している。その中心は、牧野技師が岡

山県を代表して参加した会議録であり、三菱側代表と共に軍関係者（大佐・中佐クラスの責任者）の発言が手にとる如く判明する。

掲載史料は今回、原史料の雰囲気を正確に伝えるために、旧来でいう写植の方式を採用して復刻している。読者の方々はそれぞれの経歴や問題意識の持ち方によって、史料の読み取り方が色々と変わっていくものと思われるので、一堂に会して若干の討論をおこなって頂くことを希望する。

私自身は、何故、この時期に水島に航空機生産の拠点がもってこられたのか、そして、水島の生産基地の特質は他の地域と比較していかなるものであったのか、また三菱・県・軍部の協力体制がいかに構築されていったのか、その中において動員された青年や労務者や地域住民はいかに反応したのか、など多くの疑問点・問題点・課題をかかえることとなった。勿論、その中で自分なりに納得できた点もある。

その一つは、この拠点が軍部にとって従来に存在しない極めて理想的な拠点を創造・建設しようとしたものであったということである。すなわち、民間の三菱に飛行機を製作させ（工場）、その労働力確保・兵員確保をはかり（青年学校）、航空機の輸送と航空技術兵の訓練をおこなう（航空隊）という三者の一体化を目指したものと思われる。此の点で三者協議の焦点となった問題が「滑走路」であったと確信している。

その二つ目は、軍部（主として海軍）の在り方に関してである。海軍は軍艦（主として戦艦）の建造に主力を置き、何故、航空機の製造を軽視したのか、これは全く素人の素朴な疑問であって、事実と大いに相違しているかも知れないが、今回の史料を通読していて湧き起ってきた疑問である。

いずれにしても三菱重工業水島航空機製作所は昭和一九年二月に一号機を完成させ、翌二〇年の終戦に至る期間に一式陸上攻撃機（海軍中型爆撃機）五一三機、紫電改（海軍戦闘機）九機、計五二二機を生産し、焦点となった「滑走路」より無事に飛び立っている。その生産体制は水島を中心に岡山・玉島・笠岡・津山など広範囲に及び、数多くの県民・地域住民に支えられて展開し、それぞれに様々な禍根をのこしている。

本著の刊行を機縁に、また新しい史料が出現することを期待して、この拙文を閉じる次第である。

（おおた けんいち　元山陽学園大学教授）

編著：小川江南、監修：太田健一
B５判、520ページ
発行：吉備人出版、2013.6.22
定価：本体6,000＋税